

令和 6 年 6 月 12 日現在

機関番号：33917

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00750

研究課題名（和文）日本語学習者の雑談力育成 2者および3者間会話を開始、維持、終結させる能力の研究

研究課題名（英文）A Study on Japanese as L2 Users' Ability to Initiate or Finish Small Talks between Two or Three Participants

研究代表者

鎌田 修（Kamada, Osamu）

南山大学・人文学部・研究員

研究者番号：20257760

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：何気なく交わされる雑談にはその内容如何に関わらず人と人を結ぶ根源的な言語運用能力が内包されている。本研究は、日本語を第二言語として使用する非母語話者にとっても欠かせないこの能力の発達過程を調査し、彼らのコミュニケーション能力向上に資する成果を目指した。いかに雑談を始め、維持し、そして収束させるかという点について二者間、さらに三者間の会話データを収集し分析を試みた。コロナ禍での調査研究であり、課題を残す結果になったが、ある程度の成果は得られたと思う。

研究成果の学術的意義や社会的意義

昨今の日本語教育の広がりの中、とりわけ、IT技術の進歩はともすれば翻訳機に頼ったコミュニケーションの可能性を大きくしてしまう一方、実際の生活場面での直接的な人と人とのつながりを希薄にもしてしまっている。それは日本人同士の場合だけでなく、日本に滞在、居住する外国人についても該当する問題でもある。本研究の成果は日本語を介したコミュニケーションを行う人々（母語話者、および、非母語話者）の相互理解をその原点から探り、その向上に寄与するものである。

研究成果の概要（英文）：Casual conversations, regardless of their content, encompass fundamental language skills that foster connections between individuals. This study aims to investigate the developmental process of this ability, which is crucial not only for native speakers but also for non-native speakers who use Japanese as a second language. The objective is to generate findings that contribute to enhancing their communication skills. We gathered and analyzed data from two- and three-person conversations to explore the initiation, sustenance, and conclusion of casual dialogues. Although this research was conducted amidst the COVID-19 pandemic, the results have provided some valuable insights, albeit with remaining issues to be addressed.

研究分野：日本語教育学

キーワード：雑談力 接触場面 3者間会話 プロフィシエンシー 第二言語習得 人間関係の維持 自然発話
ロールプレイ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

本研究開始時、人との関係を構築する際の複雑さが社会課題と一つされ、コミュニケーション力の強化が各方面で唱えられていた。演出家の平田オリザは長年に渡り、我々が分かり合えるためには、単なる「おしゃべり」ではない「対話」の必要性があることを唱え続けている(平田オリザ著『対話のレッスン』など)。しかし、一方で、おしゃべり、つまり、「雑談」こそ、コミュニケーション力の根源ではないかという声も上がってきた(齋藤孝『雑談力が上がる話し方』など)。実際、隣近所の挨拶でさえ十分に交わされない地域が多いことはあることは事実であろう。したがって、いきなり、「対話」ではなく、まずは、「おしゃべり」により、人と人が繋がらないことには、その先は望めないということにもなる。

この「対話」不足という社会課題は日本人同士を想定したものであるが、日本語を第二言語として学習する人達に目を向けると、問題は、より深刻である。国内の日本語学校等では、多くの場合、異なる母語背景を持つ学習者が同じ場で日本語を介した異文化交流(平田オリザの言う「対話」も)を行なっている。しかし、一步教室を出た生活場面を見ると、それらの学習者は日本人との「対話」どころか、そもそも、日本人との繋がりとなる「おしゃべり」(「雑談」)ですら実現が困難な場合が多い。

以上のような、日本語を第二言語として学習する人達の言語生活上の実態に加え、半世紀以上も前から、談話分析、会話分析などの領域で、雑談から得られる自然発話の研究は進められてきた。しかし、これらも多くは母語話者同士の自然発話を対象としており、日本語学習者(日本語非母語話者)を対象とした研究は非常に限られている。

このような研究当初の背景は現在もそれほど大きく変化したとは言えず、本研究が目指す、日本語を第二言語として使用する日本語学習者が、雑談を行うにはという課題に答えることの意味は依然として大変大きいものであると言えよう。

2. 研究の目的

本研究の目的を整理すると、以下3点にまとめることができる。

- ① 日本語母語話者、並びに、多様な母語背景を持ち、また、様々な能力レベルにある日本語非母語話者が展開する雑談に関する質の高い発話データを収集し、それを観察する。
- ② 上記①で得られたデータを記述、分析し、日本語非母語話者がどのように雑談を開始、維持、そして、収束するかを探る。一般的な2者間の会話に加え、3者間の会話も調査対象とし、より幅のある発話データの収集、観察、分析を目指す。
- ③ 上記①、②の手順を踏まえ、総合的考察を行い、日本語ならび日本語教育への貢献を目指す。

3. 研究の方法

(1) 良質なデータ収集

① 調査協力者に主導権を持たせたロールプレイ(RP)の実施:

従来のRPの多くは当該のRPで要求されているタスクの達成に主眼が置かれているが、RP開始の前段階に必要となる関係構築や維持、さらに、RP終結の際に行う関係維持には注目されてこなかった。関係構築を主たる目的とする雑談を対象とする本研究では、これらの部分にこそ焦点を当てる必要があると考えた。そのため、調査協力者、特に日本語非母語話者自身が主導権を持ち、関係構築に資する雑談の開始、維持、収束するプロセスを探るRPを考案した。

② 日本語非母語話者による雑談発話データの収集：

まず、OPI(面接式会話能力測定 Oral Proficiency Interview) という手法による調査協力者(日本語非母語話者)の日本語会話能力を測定し、かつ、母語背景の同異によるグループ分けを行う。さらに、日本語母語話者とのペア、あるいは、3者間のRPを行い、雑談データを採集した。

③ 日本語母語話者を含めた雑談データの収集：

初対面の間柄である日本語母語話者に母語話者同士、あるいは、日本語非母語話者との2者間、もしくは、3者間のRPを上記①のやり方で実施し、雑談データを収集した。

④ RPの会話場面は全て録画し、その音声データ部分は、すべてテキスト化した。また、調査協力者の表情などノンバーバルな要素も含め、談話分析のための資料とした。

⑤ 日本語非母語話者の学習背景に関わるデータの収集：

母語背景、日本語学習の場所、時間など日本語会話能力の発達に関連する事項の調査を行い、分析の参考にした。

(2) 収集した雑談データの観察：

収集データをレベル毎、母語背景毎に分類、構造、言語的要素などの取りまとめを行う。雑談の全体的な構造分析を扱うマクロ的視点と、細部の言語的要素を扱うミクロ的視点の双方から緻密な記述分析を実施する。またこれらの分析をもとに日本語母語話者の雑談データと比較する。

(3) 日本語研究、日本語教育への応用：

データの観察、分析による結果は日本語非母語話者を対象とした雑談研究や日本語学習者の習得過程研究に有用な示唆を与えるだけでなく、指導そのもの、教材作成への応用も可能である。

4. 研究成果

本科研はCovid-19の発生により予定していた活動に多大な遅延が生じ、多くの課題を残すことになったものの、主たる成果をいくつか挙げることが可能である。

(1) 雑談の再定義と雑談を収集するロールカードの作成

「雑談」の理論的基盤の構築と雑談力を測る際に必要となるロールプレイ(RP)に含まれる課題(ロールプレイカード、以下RC)の作成にあたって、初年度には、まず、「雑談」とは何か、観察すべき「雑談」の構成要素とは何かに答えるための理論的基盤の整備を行い、雑談の定義の再定義化を行った。その結果、「雑談」を「コミュニケーション上、なんらかの理由で生じた『隙間時間』を共有し、その場に相応しい人間関係を構築する言語行為」とした。「隙間時間」は、「偶然生じるもの」と「予測可能なもの」とに分けられる。また、「人間関係」は「2者、もしくは3者(以上)の間」に存在する「親密度、上下関係」などのポライトネス要因(敬語など社会的関係に敏感な言語表現の選択を左右する要因)を示す。これらによって、雑談がいかに開始され、維持され、そして、終決されるかという「雑談プロセス」の変容、さらに、雑談によって他者との人間関係が構築されたか否かを説明できるものとする。以下に若干の具体例を示す。

1) 隙間時間

(a) 偶然発生するもの。完了時間によって二つのタイプに分かれる。

1. 偶然に発生するが、完了の時間が定まっているもの(例:帰宅途中、バッテリー、友人に会い、駅まで雑談を行う)

2. 偶然に発生し、また、完了の時間も定まっていないもの(例:長距離電車で向かい合わせて座り、雑談を開始する場合)

(b) ある程度予測の立つもの(例:会議やなんらかのイベントが始まるまでの待ち時間)

2) 人間関係

雑談相手が、初めて会った人、よく知っている先輩、後輩、家族、職場の上司、部下などという親密度、社会的上下関係などによって雑談のプロセス、さらに、雑談の内容における深さ(例えば、自己の開示度)、広さ(例えば、互いに知る共通点の幅)が変容する。

以上のような考察から、本研究のデータ収集のために行うRPの初期設定として、まず、できるかぎり固定的な場面を想定することにした。初対面の話者同士が偶然生じた隙間時間を雑談によって共有し、その場に相応しい「人間関係」を構築する課題(RC)を与え、データの収集、分析を行うこととした。課題として与えたRCによって生じた「隙間時間」の共有はビデオ録画し、その後、音声データの文字化を行い、それらを観察、分析を継続中である。

(2) 作成したRCにより収集したデータの概要

本研究では、2者間(日本語母語話者と日本語非母語話者)との雑談データだけではなく、日本語母語話者2名に、日本語非母語話者が1名だけ加わる3者間による雑談データも収集した。

【2者間雑談データ 15データ(各データともに 30分程度)】

協力者:日本語母語話者 15名、日本語非母語話者15名

日本語非母語話者年齢:20歳前後

日本語非母語者日本語レベル:初級レベル1名 中級レベル10名 上級レベル4名

【3者間雑談データ 10データ(各データともに 30分程度)】

協力者:日本語母語話者 20名、日本語非母語話者10名

日本語非母語話者年齢:20歳前後

日本語非母語者日本語レベル:初級レベル1名 中級レベル8名 上級レベル2名

またデータの収集にあたって、日本語母語話者には外国人と日常的に関わりがあるかどうかなどを尋ねた。また非日本語母語話者に対しては、逆に、日本語母語話者との接触頻度を確認した。

(3) 雑談データの観察と分析

上記(2)で示した雑談データを観察すると、雑談は以下のように分けて考えることができた。

1. 雑談自体に終わりがなく、時間の制限など外部要因がない限りにおいて雑談が続くように感じられる雑談
2. 時間の終わりが来る前に雑談が終わっており、場がつながっていない雑談
3. 雑談への参加者のうち誰かが絶え間なく、話題を提供し、場の継続が保たれているような雑談

現在、このようなマクロレベルの分類に加え、日本語非母語話者の雑談行動につき、(1)自発的な質問量、(2)要求に応える発話の量、(3)他の参加者の発話へのリアクション、(4)話題に関連する話題の提供の頻度の4点を軸とした考察を進めている。

日本人との接触頻度が高い非日本語母語話者ほど、共通の話題に対して、自ら質問を行うなどの

行為が多い傾向にあることが判明している。また、ミクロレベルの言語学的観察として、うまく進んでいる雑談ほど、これまでの研究で頻繁に取り上げられる終助詞「よ」「ね」「よね」などだけではなく、多様な対人関係を示すモダリティ（言語表現）が観察されている。

（４）本研究の成果に関わる関連研究

本研究を進める過程において、初対面時の終助詞の使われた方の分析などを通して、鎌田(監) (2023)『日本語プロフィシエンシー研究の広がり』にて、研究代表者の鎌田 (pp.1-13) は自然談話における「自発的発話」のありようについて、また、共同研究者の立部 (pp.169-180) は「初対面時の雑談でもちいられる終助詞『ネ』」について本科研の支援を受けた成果を発表している。また、日本語教育への応用に関して、鎌田他 (2021)は『リアルな会話で学ぶにほんご初中級リスニング Alive』を出版し、本科研の成果に基づいた教材作成を行なっている。

引用文献：

- 鎌田修（監修）（2023）『日本語プロフィシエンシー研究の広がり』ひつじ書房
鎌田修（監修）山森理恵・金庭久美子・奥野由紀子（著）（2021）『リアルな会話で学ぶにほんご初中級リスニング Alive』ジャパン・タイムズ
立部文崇（2023）「初対面時の雑談でもちいられる終助詞『ネ』」鎌田修（監修）（2023）

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 藤田裕一郎・立部文崇	4. 巻 19
2. 論文標題 日本語教師発話の分析 - 初級と中・上級レベル授業、そして母語話者同士の会話を比較して -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 朝日大学留学生別科紀要	6. 最初と最後の頁 33-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 立部文崇
2. 発表標題 雑談における終助詞「ね」は、「ね」と「よ」の比較で教えられる？
3. 学会等名 九州日本語プロフィシェンシー研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 立部文崇
2. 発表標題 初対面の相手との関係づくり 「ネ」はどのように役立っているのか？
3. 学会等名 日本語プロフィシェンシー研究学会10周年記念シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鎌田修
2. 発表標題 プロフィシェンシー研究の広がり：分かり合える日本語による共生社会の実現に向けて
3. 学会等名 日本語プロフィシェンシー研究学会10周年記念シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 鎌田 修、由井 紀久子、池田 隆介	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 480
3. 書名 日本語プロフィシェンシー研究の広がり	

1. 著者名 鎌田修（監修）山森理恵・金庭久美子・奥野由紀子（著）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ジャパン・タイムズ	5. 総ページ数 119
3. 書名 『リアルな会話で学ぶにほんご初中級リスニングAlive』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	立部 文崇 (Tatebe Fumitaka) (10724081)	周南公立大学・経済学部・准教授 (25504)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------